残念な幼馴染

-NTR私小説-

突然現れた理想の彼女は僕の幼馴染。
でも現実の世界に降り立った僕だけの
天使は、結局あんな奴らに寝取られて、
そして何もかも奪われて

八ヶ岳昌司

序章　残念な性癖

人間というものは、何歳くらいから性に目覚めるものなのでしょうか。

一般的にはそれは思春期だとされています。十代になり、第二次性徴が起こり、少年少女たちは男と女ということを意識し始めると言われています。

けれども男の子が女の子を好きになり、女の子が男の子に惹かれるのは、思春期を迎える以前の子供時代にも当てはまることのように思います。

男と女という生殖のルールがあり、人間社会がそのルールの上に成り立っている以上、人間というものは日々の暮らしの中で、子供であっても『男の子』であること、そして『女の子』であることを意識させられるのです。

けれどもそうした社会的な規範を刷り込まれる前にも、人間の中には異性を求める意識があるような気がします。それは何億年もの間に遺伝子に刻み込まれた動物としての本能なのかもしれませんし、あるいは生まれた時から愛を求め、運命の相手を探そうとする心の渇きなのかもしれません。

人は生まれた時から、心のどこかが欠けていると言います。
その欠けた部分を埋めるために、愛する誰かを、運命の相手を、人は生涯にわたって探し求めます。

自分の人生を振り返って、私はこの事は確かに真実であると感じます。
平凡な男に過ぎない私が、様々な困難があったにも関わらず、初恋の相手である愛美（まなみ）と結ばれ、夫婦となって家庭を築くことが出来たのは、彼女こそが自分にとっての運命の相手だと信じていたからです。

私はその運命の相手である愛美と、人生のごく早い時期に出会いました。
私と愛美は、家が近所で、お互いに幼稚園児だった頃から知っている、いわゆる幼馴染だからです。
そのせいでしょうか。私は彼女と初めて出会った幼い頃の事を、今でもよく覚えています。

当時、私達家族が住んでいた団地。
一階に住んでいた私の家族と、二階に住んでいた愛美の家族。
夏に行われたバーベキューの際に、幼い私は一人の女の子と仲良くなりました。私はその子

をマナミちゃんと呼び、その子は私をマサフミくんと呼び、私達は子供心に照れを感じつつも次第に打ち解けて、いつしか一緒に絵本を読んでいました。

二人の子供の年齢が同じだとわかると、互いの両親も自然と仲良くなり、そこから家族ぐるみの付き合いが始まりました。

私はそのマナミちゃんと毎日のように遊ぶようになり、近所の子供達と一緒にボール遊びをしたり、鬼ごっこをしたりしていました。

けれども一番好きだったのは、二人だけで遊ぶ時間でした。

あまり活発な子供ではなかった私は運動が嫌いで、マナミちゃんと一緒に部屋に閉じこもり、絵本や図鑑を読んだり、人形やおもちゃで遊ぶ方が好きだったのです。普通は男の子だったらロボットやヒーローが好きなものですが、私はマナミちゃんが持って来る女の子向けの人形が好きで、一緒に着せ替え遊びなどをしていたのです。

思えば当時から私は彼女のことが好きだったのだと思います。

近所の子供達の中でも、私はマナミちゃんだけを選んで遊んでいましたし、子供ながらに嫉妬の気持ちや、彼女を独占したい気持ちさえあったと思います。彼女が他の男の子と仲良くしていると、私はなんだか悲しい気持ちになったからです。

そして夜寝る前には、よく彼女のことを考えていました。
恋愛や結婚ということがわからなくても、マナミちゃんという可愛い女の子のことが好きだという気持ちは、きちんと自分の中にあったのです。

寝る前に布団の中で目を閉じると、マナミちゃんの姿が浮かんできました。
マナミちゃんの笑顔。彼女のかけてくれた優しい言葉。
嬉しさを感じつつも、私はなぜだかマナミちゃんがお風呂に入るところ、そして裸になるところを想像します。
想像と言っても子供の事なので、細かい部分はわからず、ただ白い肌を思い浮かべるだけです。
私の想像の中で、お風呂の中の裸になったマナミちゃんは自分の身体を隠し「いや、いや」と恥ずかしがって、嫌がる素振りをします。それが可愛くて、私は想像の中でマナミちゃんを「つん、つん」と突つきます。
するとマナミちゃんは「あん、あん」と可愛らしい声を出して、くねくねと身体をよじります。

まだ幼かった私はセックスのことなど知りません。恋愛や結婚ということすらもわかっていません。

それなのに、彼女の裸を想像するなんて、不思議なことだと思います。

好きな人と愛し合いたいという気持ちは、人間は生まれながらにして持っているものなのだと、幼い日を思い出しながら私はそう感じます。

そして覚えている限りでは、そうやって裸で身をよじる彼女のことを思い浮かべながら、私は自分の股間に手を添えていました。

子供心に、おち○ちんをいじるとなんだか気持ちがいいということに、気付いていたのかもしれません。

おち○ちんの先の方に指を添えて、ぐりぐりと指を動かすと、なんだか気持ちよくなって、やがて『かくん』という感触と共に強い快感が一瞬、訪れます。

まだ皮に包まれた先端の割れ目のあたりを、二本の指で大雑把に刺激するこの夜の儀式を、私は幼い頃から、小学校三年生くらいになるまでやっていた記憶があります。

人間の性癖というものは、いつ頃から形作られ、何歳ぐらいで決まるものなのでしょうか？

幼い私が、大好きなマナミちゃんのことを考えながら行っていたこの就寝前の儀式の事を思

い出すと、私は何とも言えない複雑な気持ちになります。

それは楽しかった子供時代の記憶であると同時に、大人になってからの私達の性癖の原点とも言えるからです。

大人になり、恋人同士となり、夫婦となってからも、私がやっていることはこれと変わらないのです。

私の妻である愛美は裸になり、「いやっ、いやっ」と声を上げながら、くねくねと身体をよじります。

裸の身体を愛撫された彼女はやがて「あんっ、あんっ」という切なくも可愛らしい声を上げ始め、それを見た私は幼い頃と同様に、自分の股間を刺激し始めます。

ただ、子供の頃にわからなかったのは、彼女の胸が大きくふくらみ、白くたわわな乳房が揺れていること。

そして彼女が大きく足を開き、その股間には黒い毛が生い茂っていること。

そして子供の頃には見えなかったものが、他にもありました。

彼女の姿だけを思い浮かべていた無垢な子供時代には、わからなかったこと。

それは、彼女の身体をまさぐり、愛撫している手は、一本ではなく、何本もあるということ。

そして、その手は自分の手ではありません。

私の右手は、自分の股間を握りしめて塞がっているのですから。

何本もの手で身体中を荒々しくまさぐられ、裸の愛美は苦しそうな表情になり「んっ、んんっ」という切ない吐息を漏らします。

その様子はとても苦しそうですが、私はもちろん、愛美本人も、それが嫌で漏らしている吐息ではないことをわかっています。

そして指先で先端をいじっていただけの子供の頃とは違い、私は自分の、今では皮の剥けたおち〇ちんを、力一杯に握りしめてしごきます。子供の頃とは比べ物にならないほどの快感がこみ上げてきて、『がくん』という感触と共に体の中で何かがはちきれ、私のおち〇ちんからは白い精液が噴射されます。その大量の体液はベッドの上のシーツや、ベッドサイドの絨毯を濡らし、独特の臭みのある匂いを放ちます。

子供の頃には、小さな快感はあっても、精液を発射することは出来なかった小さなおち○ちん。

大人になり、愛美の夫となった私のチ○ポは、人並み以下とは言っても、子供だった頃の倍はあるでしょう。

けれども、子供の頃には想像も出来なかったこと。

それは、チ○ポは一本だけではないということです。

たった今、気持ちよくなって精液を出してしまった私のオチ○チンがしなだれている目の前で、もう一本のオチ○チンが、愛美の股間の茂みの中へと入っていきます。

それは、愛美の夫である私のオチ○チンよりもさらに大きく、太いオチ○チンです。

勃起して立ち上がった時だけ皮の中から顔を出す私のオチ○チンと違い、それはいつも皮が剥けていて、先端の亀頭の部分も大きく張り出した立派なオチ○チンです。

そのオチ○チンが愛美の股間に入れられると、愛美は子供の頃には想像も出来なかったような、はしたなく大きな声を出して喘ぎます。その悲鳴のような声は、男の人が腰を動かすのにつれて、一定のリズムで部屋中に響きます。

けれどもそれが悲しくて上げる悲鳴でないことは、大人になった政文君と愛美ちゃんはもちろん知っています。その証拠に、愛美ちゃんの上げる声には、快感を感じている甘い響きが混じっています。

……夫のマサフミくんよりもはるかに大きなオチ○チンを入れられて、マナミちゃんは喜んでいるのです。

そしてそのはしたなく甘い声を上げているマナミちゃんの口も、そこに現れたもう一本のオチ○チンで塞がれます。これもまた、マサフミくんのものよりも、大きく太いオチ○チンです。

そしてさらに目を凝らせば、マナミちゃんの身体の横に、さらにもう一本のオチ○チンがあるのが見えます。マサフミくんのものとくらべて、5センチ以上も長いそのオチ○チンの持ち主は、自分がオチ○チンをマナミちゃんの股間に入れる順番が待ち切れず、手を伸ばしてマナミちゃんの胸をつかみ、もみ、もみ、と荒々しく揉みしだいています。

マナミちゃんの中にオチ○チンを入れて腰を動かしていた男は、どけ、と言って、胸を揉んでいた男の手をどかせると、下半身がひとつになった状態のまま、背中を屈めてマナミちゃん

の胸をなめまわし始めました。マナミちゃんの大きくやわらかいおっぱいの上に、男の舌が這い回り、おっぱいは唾液で濡れてぬるぬるになり、部屋の明かりに照らされてつやつやと光ります。そのぬるぬるになったおっぱいを見て、夫であるマサフミくんは興奮し、しなだれていた小さなオチ〇チンが再び起き上がり、皮の中から頭が覗きます。

「ああっ、ああっ!!」

挿入されながら乳首をしゃぶられて、強い喜びを感じたマナミちゃんは顔をのけぞらせ、上擦った声を出します。

彼女の口にオチ〇チンを入れていた男はその様子を見て身を引き、マナミちゃんに触れているのは挿入している男だけになりました。

その男はカツさんという名前で、マサフミくんとマナミちゃんよりも十歳も歳上ですが、マナミちゃんと遊ぶのはこれで三度目です。

「奥さん、可愛いよ、俺の子供産んでね……!」

カツさんはそう言って、ピンク色に紅潮したマナミちゃんの顔に頬ずりをし、そしてマナミ

ちゃんの口に自分の口を重ねました。
愛し合う恋人同士や、結婚式を挙げた夫婦以外はしてはいけないはずの、男と女のキスです。
でもそれは結婚式で誓いの時にするような素敵なキスではありません。舌を舌を絡め合い、まるで何かを食べているような、お互いに貪り合うような激しいキスです。マナミちゃんの口はたちまちベとベとになり、本当はマサフミくんの奥さんであるはずのマナミちゃんの口の中で、彼女の唾液と、旦那さんでもなければ恋人でもないカツさんの唾液とが混じり合います。

「うんっ、うんっ……!!」

カツさんの言葉に答えるように、キスで口を塞がれつつも可愛らしく頷いていたマナミちゃんでしたが、カツさんの腰の動きが激しくなると、途端に切羽詰まった様子になりました。

「あっ、いやっ！　やめてっ！　いっちゃう!!　おかしくなっちゃう!!」

キスをやめたカツさんも余裕がなくなり、苦しそうな表情を顔に浮かべたまま、マナミちゃんの身体の上で、腰の動きがどんどん速くなっていきます。

「いやっ、いやぁっ、いっ、いやぁぁっ……!!」

カツさんの腰の動きが速くなり、マナミちゃんの声が高くなっていくと、それを見ているマサフミくんも興奮し、自分の股間をしごく手の動きが激しくなっていきます。

「うぉっ、奥さん……やばい……いい女過ぎる……で、出るっ……!!」

「あっ、やめっ！　いやっ、いやっ、いいいいいいいいいいいいイィっ!!」

カツさんの腰の動きが最高潮に達したかと思うと、次の瞬間、ぴたりと止まり、カツさんは苦しそうな表情で歯を食いしばります。

それと同時に、マナミちゃんは今までで一番大きな声を出し、その甲高い声は後を引きながら部屋中に響きます。それは部屋の外にいる人にも聞こえてしまいそうな大声です。股間の奥の奥まで差し込まれた固くて熱いものが脈打つ感触に、マナミちゃんはぶるっと身体を震わせ、カツさんにぎゅっとしがみついて、湧き上がるがくがくとした快感に必死で耐えています。

そしてマサフミくんは、先程と同じようにオチ〇チンの先から白い精液を噴射させ、そのね

ばねばした白い滴がシーツの上に飛び散ります。

みんなが喜んでいます。

奥さんを他人に取られたマサフミくんはショックで鼻水を垂らし、目は赤くなって涙が浮かんでいますが、本当は気持ちいいのです。

オチ○チンから精液を噴射させるのは気持ちいい証拠です。

マサフミくんは、ほんの十分足らずの間に、オチ○チンから二度も勢い良く精液を噴射させたのですから、本当はとても気持ちいいのです。

マナミちゃんも気持ちよくなっています。

足を開いたまま、カツさんの大きな背中に両手を回し、ぎゅっと抱き付いているマナミちゃんは、大きな絶頂の余韻に浸り、言葉に出来ない幸福感に満たされています。

カツさんも苦しそうな顔をしていますが、とても気持ちいいのです。

オチ○チンから精液を噴射して気持ちいいのはマサフミくんと同じですが、シーツの上ではなく、女の人の股間の穴の中に噴射したカツさんは、その何倍もの快感を味わっています。

苦しそうな表情で何かに耐えているのは、湧き上がる快感に耐えているのです。

「きゃっ！」

快感の絶頂を味わったのも束の間、マナミちゃんの横に座っていた男がカツさんを押しのけ、マナミちゃんにのしかかって、マサフミくんよりも7、8センチは長いオチ〇チンをマナミちゃんの股間に入れようとします。カツさんの出した精液でぬるぬるになったマナミちゃんの股間の穴に、その長くて大きなオチ〇チンは音も立てずにするりと入ってしまいました。

「あぁぁぁぁあっ、いやぁぁぁぁぁぁあっ!!」

男の人が腰を動かし始め、マナミちゃんがまた声を上げます。さっきよりも、よりいっそう大きな声です。

三人の男の人達は口を緩ませ、いひひ、いひひ、と嫌らしく笑っています。

全員が楽しんでいます。みんな喜んでいます。

マナミちゃんは苦しそうな声を出していても、心の中では喜んでいます。

マサフミくんはショックで泣きはらしていても、オチ〇チンは喜んでいます。

みんな仲良く遊んでいるのです。
一人の女と、三人の男、そして見ているだけの夫が一人。
みんな裸になっています。
大人は普段はスーツを着ていますが、遊ぶ時には裸になるからです。

マナミちゃんはとても良い身体をした、きれいな女の人です。
だからたくさんの男の人が、マナミちゃんと遊びたがります。
きれいな女の人と遊びたい男の人達。
マサフミくんのことが好きだけど、ときどき他の男の人とも遊びたいマナミちゃん。
マナミちゃんのことが好きで、どんな時でもマナミちゃんのことをずっと見ていたいマサフミくん。

みんなが楽しく幸せになれるように、大人はちゃんと考えて遊んでいるのです。

けれどもマナミちゃんの股間の穴の奥では、大変なことが起きています。

カツさんがマナミちゃんの中に精液を発射するのは、本当は絶対にしてはいけないことです。男の人が女の人の中で精液を出すことは、結婚式のキス以上に神聖で、本気で愛し合う恋人同士か、愛を誓い合った夫婦でなければやってはいけないことです。

マサフミくんが絨毯やシーツの上に精液を発射しても、何も起きません。けれども、カツさんが今したように、男の人が女の人の股間の穴の中で精液を出してしまうと、赤ちゃんが出来てしまうかもしれないのです。

赤ちゃんは、結婚した夫婦が作るものです。

旦那さんが、奥さんの中に自分の精液を発射すると、二人の子供が産まれます。

そして旦那さんはその赤ちゃんのお父さんになり、奥さんはお母さんになります。

では、マサフミくんという旦那さんがいるのに、カツさんの赤ちゃんを身ごもってしまったら、マナミちゃんはどうなるのでしょうか。

旦那さんはマサフミくんなのに、赤ちゃんのお父さんはカツさんになってしまいます。

カツさんだけではありません。他の二人の男の人も、これからマナミちゃんの中に自分の精

液を、何度も何度も発射していきます。これではマナミちゃんが赤ちゃんを産んでも、誰がお父さんなのかわからなくなってしまいます。

男の人が女の人の股間におち○ちんを入れるのは、本当は結婚した夫婦でないとやってはいけないことなのです。結婚すれば、お嫁さんは旦那さんのものになるからです。結婚したお婿さんだけが、お嫁さんのパンツを脱がせて、その股間に自分のおち○ちんを入れることが出来るのです。

では、カツさんにおち○ちんを入れられたマナミちゃんは、カツさんのお嫁さんになってしまうのでしょうか？

三人の男の人に交代でおち○ちんを入れられた後には、マナミちゃんはもうマサフミくんのお嫁さんではなくなってしまうのでしょうか？

本当のことを言うと、マナミちゃんはこの三人の男の人以外にも、たくさんの男の人と遊んで、股間の穴の中に男の人の精液を出されてしまっています。

それはマナミちゃんがきれいな女の人で、男の人に人気があるからです。

マサフミくんとマナミちゃんは、五歳の時からの仲の良い幼馴染です。
真面目なマサフミくんは、女の人はこれまでたった一人、マナミちゃんとしか裸になって遊んだことがありません。
けれどもマナミちゃんは、今までに百人以上の男の人と裸になって遊んで、気持ちいいことをしてしまっています。

マナミちゃんはそんなにたくさんの男の人におち〇ちんを入れられて、その男の人達にお嫁さんになったのと同じことをされて、身体中をかわいがられて、股間の中に精液を出されました。そうやってかわいがられるうちにマナミちゃんのお腹の中には赤ちゃんが出来てしまい、マナミちゃんは赤ちゃんを産みました。その赤ちゃんのお母さんはマナミちゃんですが、お父さんはマサフミくんではありません。

結婚したら、お嫁さんは、お婿さんにかわいがられます。
でもマナミちゃんは、お婿さんであるマサフミくん以外にも、たくさんの男の人にかわいがられています。
マナミちゃんは、マサフミくんのお嫁さんだけど、本当はマサフミくんだけのお嫁さんじゃない……

たくさんの男の人と遊んで仲良くなったマナミちゃんは、みんなのお嫁さんになったのです。

けれどもここで質問があります。

マナミちゃんがみんなのお嫁さんになってしまっても、マサフミくんとマナミちゃんは、仲良しでいられるのでしょうか……？

……確かに私は幼い頃の夢を叶えました。

子供の頃から大好きだった愛美と夫婦となり、あの頃毎夜布団の中で思い描いていたように、裸の愛美を愛することが出来るようになりました。

けれども、そこに何本もの他人の手があり、何本もの男のチ〇ポがあるとは、子供の頃には思ってもいませんでした。

あの頃、想像の中で「いや、いや」と言って身をよじる裸の愛美は、まるで誰かにいじめられているようで、けれども私はその様子が愛らしくて仕方がありませんでした。幼い頃からそんな愛美を想像して興奮していた私は、やはりそういった性癖の持ち主だったのかもしれませ

ん。

子供の頃、まだ純真だったあの頃、私はいじめられている愛美のことを守らなければいけないと思っていました。

嫌がる愛美が本当は全然嫌がっておらず、喜んでいることなど、幼い私にはわかるはずもありませんでした。

いつしか、大人になっていく過程で、そうやって男達にいじめられることが快感になってしまった私達。

敗北し、奪われ、虐げられることの快感。

そして女としての愛美の本性。

男達に奪われることが気持ちよくて仕方ないという、愛美の女の性。

そしてそんな愛美を見て興奮してしまう、私の男としての弱さと性癖。

それらを理解するためには、何年もの歳月といくつもの事件を乗り越え、そして何本もの肉棒を愛美の中に突っ込まれなければならなかったのです。

第一章　幼馴染

幼馴染と結婚したと言うと、周囲は羨ましがります。

勝手にロマンティックな想像をし、『初恋』であるとか、『運命』といった言葉を使って、いかにそれが貴重で素晴らしいことかということを語り、驚いた様子になります。

けれども実際には幼馴染というものは腐れ縁に近く、一緒に居たとしてもそうそういつもロマンティックな感情を抱いているわけではありません。

ひとつには幼馴染というのは精神的に距離の近い関係であるため、相手に異性を感じにくいということがあります。

兄妹のようにして育ってしまうため、いざ大人になっても、お互いを異性として見れないのです。

私、山須賀政文（やますがまさふみ）と、妻である愛美（旧姓　本木城愛美　もときしろまなみ）の間にも、そのように距離が近過ぎる故の逡巡の時期がありました。私が愛美に正式に愛の告白をしたのが、やっと住鉢歳、学園の三年生の頃だったという事実が、幼馴染でありな

がら遅咲きな私達の恋愛感情の発展を物語っています。

しかし、私達はずっと一緒だったわけではなく、両親の仕事の関係による引越しのため、離れていた時期がありました。

なまじずっと共に育ったのではなく、多感な思春期の時期を離れて過ごしていたということも、あるいは私達が最終的に恋人となり夫婦となるためには、必要な要素だったのかもしれません。

なぜならお互いに住録歳になろうとする頃、私達は再会しましたが、その時、私は女として成長した愛美に衝撃を受けたからです。

久しぶりの再会だったからこそ、私は愛美に女を感じ、そして恋をしたのです。

先にも述べたように、私と愛美の出会いは五歳の頃まで遡ります。

当時住んでいた団地の、一階に私は住み、愛美の家族は二階に住んでいました。

そして夏のバーベキューの際に仲良くなり、それからはずっと仲の良い友達だったのです。

それは、周囲から見て少し心配になるほどの仲の良さだったようです。

たくさんの子供たちと遊んで社会性や協調性を身に付けなければいけない子供時代に、私と愛美はいつも一緒で、二人だけで部屋の中で遊んでいることがほとんどでした。

小学生になっても私達は仲良しで、子供ながらに男女が分かれて遊びがちなクラスの中で、不自然なほどに仲のいい私と愛美は周囲のからかいの対象になることもありました。

「お前ら、付き合ってるのかよ～」

「夫婦だ、夫婦。ふたりの世界～」

そう言って囃し立てるクラスの男子に、愛美は言い返していました。

「わたしはマサくんが好きだから一緒にいるの。マサくんはあんたたちと違って、真面目で勉強もできるのよ？　あんたたちには関係ないんだから、放っておいて」

そう言って愛美は掃除用の帚を振り回し、悪ガキ達を追い払います。

思えば子供の頃から、愛美は気の強いところがありました。

「もう、信じられない、馬鹿男子。マサくん、帰りましょ？」

授業後の掃除を終えると愛美はそう言って私の手を引き、二人だけで下校します。

この時期の私達の仲は、愛美が積極的にリードしている面がありました。それは、おませな女の子だった愛美が、幼い頃からの仲である私を相手に、恋人ごっこに夢中になっていたせいではないかと思います。

ですが帰宅すれば、どちらかの家に行って二人で宿題をやったりしていたため、二人とも成績は良く、先生達からもお利口さんの優等生として覚えられていました。

けれども小学校三年生が終わろうとする頃、私の家に引越しの話が持ち上がりました。

両親のやっている仕事が順調に発展し、住んでいる団地が手狭になってきたため、市の郊外にマイホームを購入し、そこへ引っ越すことになったのです。

大人の目線から見れば、同じ市内での引越しに過ぎませんが、子供にとってみれば、それは別世界です。

引越しすれば、学校も転校することになり、それは愛美とのお別れを意味します。

私はある朝、母親から引越しについて告げられた時のことを今でもよく覚えています。

突然、その話が出て、転校という言葉を聞かされた時に、私はじんわりと目に涙が浮かんでくるのがわかりました。

子供心に、僕はマナミちゃんのことが好きだったんだ、とわかったのはその時です。五歳の時からいつも一緒にいるのが当たり前だった彼女と、離ればなれになるというのは、私には考えられなかったのです。

愛美はもっと大変で、転校の話を聞かされた彼女は大声で泣きわめき、何時間もの間、泣きじゃくっていました。

「一緒に吹奏楽やるって約束したじゃない！」

四年生からクラブが始まるので、二人で吹奏楽クラブに入ろうと、私と愛美は話していたのです。

「絶対、絶対、忘れないでね！　私達、将来結婚するんだからね！　手紙書いてね！」

子供ながらに私達は涙のお別れをし、そして私は、市内でも反対側に位置する小学校で転校生として新しい生活を始めました。

けれども、いかに仲の良い同士と言っても、離れてしまえば次第に相手のことは頭の中から消えていきます。

大人でもそうなのですから、子供にとっては尚更でした。

新しい学校での毎日の生活に追われながら、書くと言っていた手紙も次第に少なくなり、一年もたつ頃には、やりとりはまったく無くなりました。

マナミちゃんとの思い出は、子供の頃の淡い記憶として、頭の片隅に追いやられ、やがて私は中学生となり、ティーンエイジャーとなり、思春期を迎えました。

私が中学時代をあまり思い出したくないのは、思春期特有の恥ずかしい思い出がたくさん詰まっているからという理由もありますが、それ以上にそれが暗く、つらい時期だったからでした。

中学校の三年間を通じて、私はクラスの中でいじめに合い、それは暗い青春の幕開けとなりました。

常に暴力を振るわれ、体中が痛み、勉学に集中することも出来ません。

最初は良かった成績も次第に落ち込み、教師達にも見放される中、私は何を支えにあのつらい三年間を乗り越えたのかわかりません。

どこにも居場所がなく、友人もなく、また恋もなく、授業を抜け出して屋上で空を眺めながら、私は時折、幸せだった子供時代のことを思い出すことがありました。そこには私のことを好きだと言ってくれた女の子がいました。あの頃は無邪気でよかったなあ、などと考えつつ、でもそれは遠い昔の、まるで別の世界の出来事のように思われました。

そんな暗くつらい中学生活を送っていたので、その後、市内の私立学校に進学した時にも、私は別段に期待はしていませんでした。

これまでと同じように、暗く、孤独な学校生活が待っているだけだと思っていたのです。

友人のいない孤独な学校生活の中、必死で受験勉強に取り組んだお陰で、私は最後の半年で

なんとか遅れを取り戻し、市内でも上位の偏差値を持つ学校に進学することが出来ました。
そしてそんな私の努力に、神様はご褒美をくれたのです。

学校最初の日、私は早めに登校し、名簿に書かれた番号の席に座って、誰とも話すことなく始業の時間を待っていました。

「オレはよ～、まずはこの一年の間に、童貞を捨てるぜ。それから卒業するまでの間に、最低十人とセックスしてやるぜ」

私の席の斜め前に座っている男子学生が、二人の友人を相手に何やら豪語しています。学校初日から、げへへへ、と下品な笑いを漏らしつつ粗野な雰囲気を振りまいているその男子生徒を見て、私は嫌な気分になりました。
中学時代、自分がいじめられていたのは、こういうタイプの生徒だったからです。
せっかく必死の努力をして進学したのに、また野生の猿みたいな連中と一緒に生活しなきゃいけないんだろうか……

「でもなぁ、こうやって見てみると、カワイイ子ってなかなかいないもんだな。これなら中学の頃の方がマシだったぜ。間違った学校に来ちまったかな……」

男子生徒はそう言って、遠慮のない視線で教室を見回しています。

彼の言っていることは、あながち的外れではありません。学校にはカラーというものがあります。すべての生徒が一緒だった公立中学とは違い、受験の成績で振り分けられて進学した学校にはある一定の属性の生徒が集まります。

この鴨嘴学園は、市内でも優秀な偏差値を持つ学校です。派手な見た目の、いかにも遊び好きな女子生徒よりは、真面目そうな外見の地味な学生が多いのは事実だからです。

「どこかに、オレを熱くさせるようないい女はいねえかな～」

男子生徒はそう言って教室中を見回しますが、彼のお眼鏡にかなう女子はこの教室には居ないようです。

教室の中の生徒は、初日から傍若無人な言動をしている彼を無視して、誰も目を合わせようとしません。

比較的真面目な学生の多いこの鴨嘴学園の中では、彼は明らかに浮いています。

本人の言う通り、何かの間違いで、彼はこの学園に入学したのかもしれません。

私は配られた席名簿にそっと目をやり、自分の左斜め前に座っているこの男子学生の名前を確認しました。席順を象った名簿には『矢崎』とだけ名前が書かれています。

一緒に話をしている男子生徒は、一人は原島、もう一人は佐治と言うようです。話し振りからすると、彼らは同じ中学だったみたいです。いかにも悪友三人組といった雰囲気で、私は彼らと関わりたくないなと思いました。

「おおっ、誰だ、あの女は？　カワイイじゃねえか。スタイルもいいし、胸もでかい。足も長いし、モデルかよ？」

突然、矢崎が大声を上げたので、私は驚いて彼の方を見ました。

矢崎は目を輝かせて、教室の後ろの入口を見ています。私は思わず彼の視線の先を振り返ってしまいました。彼の言葉に釣られたのか、同じように何人かの生徒が後ろを振り返っています。

一人の女子生徒が、颯爽とした足取りで教室に入ってきます。

すらっと背が高く、矢崎の言葉どおり、抜群のスタイルです。きりっとした凛々しい眉毛に、大きな目。凛とした雰囲気をまとい、きれいなのに芯が一本通っているようで、一目でわかる魅力的な何かがあります。プロポーションも絶品で、私は彼女の健康的な胸の膨らみに、自然に目が行ってしまいました。

「やべえ、オレは絶対にあの子とヤるぞ!?　処女かなぁ……!?」

教室の中にいる全員に聞こえるほどの声でそう息巻く矢崎の言葉を気にもかけず、その女子生徒はこちらに向かって歩いてきます。

私は口をぽかんと開けて、ただただその女子生徒を眺めていました。何も考えられず、私は歩いて来る彼女の姿に見とれていたのです。

思考停止に陥っている私をよそに、彼女はやって来て、そして私の右隣の席に座りました。席名簿を見ると、そこには『本木城』と書かれています。

「久しぶり」

鈴を転がすような声に振り向くと、彼女が私の方を見て笑っています。
その人懐こい、けれどもどこか気の強そうな笑顔を見て、私ははっと気付きました。

「ま、マナミ……ちゃん……!?」

「覚えていてくれて嬉しいわ、マサフミくん。名簿を見て、同じクラスだってわかった時、わたしとっても嬉しかった。それに席まで隣だなんて。きっと運命ね」

「え……!?」

「わたしはずっとあなたのこと、忘れてなかったよ？　つらい時には、いつでもあの頃のことを思い出してた。マサくんは、どうだった？」

「え、その……？　どうだって、って言われても……」

突然現れたスタイル抜群の美少女に「マサくん」だなんて呼ばれても、どう反応していいかわかりません。私の中では、子供の頃に仲の良かったマナミちゃんと、目の前の魅力的な美少

女が、うまく結びついてくれないのです。

「感動の再会なのに、なんだかつれない反応だなぁ。わたしみたいな可愛い女の子が、今まで彼氏も作らずに生きてきたのは、こうやって君にまた会える日を信じてたからなんだぞ？」

「いや、でも……なんか照れるな……もう何年も会ってなかったし……」

子供の頃、確かにマナミちゃんは積極的な女の子でした。思い込みが強く、大人の振りをしたがるおませな女の子。そんなマナミちゃんが、私のことを好きだと言っても、私はそれほど気に留めていませんでした。小さな子供が「私はたかしくんのお嫁さんになる」と言っても、大人は笑って見ているのと同じことです。

けれども、こうして魅力的な美少女に成長したマナミちゃんに、当時と同じノリでアタックされると、私は当惑してしまいます。目の前にいる彼女の存在があまりに生々しく、私はそんな現実が信じられないのです。

「照れる必要なんて無いじゃない。わたしたち、いつも一緒にお風呂に入ってた仲なんだから」

彼女が笑顔で発したその言葉に、周囲の生徒達の視線が一斉にこちらを向くのがわかります。

確かに私と彼女は、九歳になるまで、時折一緒にお風呂に入っていた間柄です。けれども、小学校低学年の子供の頃と今では、その意味はまったく違います。

ちらっと斜め前を見ると、矢崎がこちらの方を向いて、口を開けて唖然としているのがわかりました。

美少女の口から出た、一緒にお風呂に入っていたという言葉に、彼も衝撃を受けているのです。

「わたしのこと、お嫁さんにしてくれるって……言ったよね……？」

クラスの視線が注がれる中、愛美は丸く大きな目を輝かせて、上目遣いな視線を投げかけながら、私に向かってそう言いました。

「い、言ったかも……」

私に投げかけられる夢見がちな愛美の視線。そしてそれ以上に私に注がれているクラス中の視線。その両方を痛い程に感じながら、私はやっとの思いで、そう呟きました。

「ま、マジかよ……!?」

矢崎が大声を上げますが、もう誰も彼の方を見ません。

誰もが、新生活初日に目の前で起きたドラマチックな再会と、美少女の口から出た愛の告白に、度肝を抜かれているのです。

これは面倒なことになりそうだ。

混乱した頭の中で、私はぼんやりとそう考えていました。

放課後の中庭、私と愛美はベンチに腰掛けて、積もる話をしていました。

「マナちゃん、ごめんね……あの時、手紙書くのやめちゃって……」

「ううん、いいの。男の子はそういうものだって、お母さんも言ってたから」

スタイル抜群の美少女と一緒に、小さなベンチで隣同士。
呼び方こそ小学生の頃と同じに戻っても、私はまだこの状況が照れくさく、どこかどぎまぎとした落ち着かない態度のまま、会話を続けています。

「あの頃、わたしがマサくんと結婚するって言っても、誰も信じてなかった。うちのお母さんも、お父さんも、きっと信じてなかったと思う。でも、わたしはずっと忘れなかった……」

愛美はそう言って、私の顔をまっすぐに見つめてきました。

愛美は確かに可愛くなりました。きりりとした太めの眉毛、その下にある丸くくりくりとした大きな目。鼻は少し低めですが、気の強そうな目元と比べて、あどけなさを残す紅い頬と、甘えん坊な印象を与える平べったい唇が、均整のとれた美しさと愛嬌のある個性のバランスを保っています。
けれども、その黒い瞳の奥にある、思い込みの強さを伴った好奇心の輝きは、子供の頃と変わりません。

「マサくんは、どう？　私がお嫁さんになりたいって言った時、私のこと、本気で信じてくれていた……？」

その思い込みをぶつけるように、私を見つめる彼女のまっすぐな視線に、私は思わず目を逸らし、下を向いてしまいます。

「ど、ど、どうかな……僕はマナちゃんと違って、本当にまだ子供だったから、あの頃は……」

私の答えに、愛美はちょっとだけ寂しそうな顔をして、けれどもすぐに元の笑顔に戻って会話を続けました。

「中学では何をやっていたの？　わたし、マサくんと一緒に吹奏楽をやるって約束したから、あの後、小学校でも、中学に入ってからも、ずっと吹奏楽部だったのよ？」

愛美の質問に、私は自分が情けないような、彼女に申し訳ないような、そんな気持ちになりました。私は彼女が一緒に吹奏楽をやろうと言っていたことも、すっかり忘れてしまっていたのです。

「吹奏楽か……そういえば、そんなことも言ってたな。僕は……僕は中学では、帰宅部だったんだ。何のクラブにも入れなかった。こんなことマナちゃんに言うの、本当は恥ずかしいんだけど、僕は中学ではずっと、いじめられてたんだ……だから……」

だから、引っ越して離ればなれになって良かったのかもしれない。いじめられている情けない姿を、マナちゃんに見られなくて済んだから……

そう言おうとした私の言葉を、愛美のしゃくり上げるような声が遮りました。

「マサくん、ひどい……いじめられていたなんて……ごめんね、わたしが一緒に居てあげられなくて……」

「えっ……？」

驚いて彼女の顔を見ると、愛美は涙を流しています。自分の恥ずかしい過去を打ち明けたつもりなのに、突然泣き出してしまった愛美の様子に、私は当惑して、次の言葉が出てきません。

「マサくんがつらい時に、そばに居てあげられなくて、本当にごめんなさい……もし一緒に居たら、わたしはそんなこと絶対にさせなかった。わたしは絶対に、マサくんを守ったわ」

涙を流しながら、真剣な顔でそう言う愛美に、私は心を打たれつつも困惑せざるを得ません。

「そ、そんなことしたら、マナちゃんまで一緒にいじめられちゃうよ……？」

「いいの。マサくんと一緒なら、わたしいじめられたって構わない。いじめられるつらさなら、わたしだってわかるもの……」

「マ、マナちゃん……」

毅然とした表情のまま、まっすぐ遠くを見るような視線になった愛美に、私は彼女の心の中を察して言葉が出なくなります。

「わたしも中学の時は嫌われていたの。クラスではずっと嫌われ者で、友達もいなくて。わたしは物事をはっきり言うから、うざい女、面倒くさい女って言われて……いつも孤独だった……」

彼女の言葉を聞きながら、私は愛美がクラスで孤立していたという事が容易に想像出来ました。小学生の当時でも、愛美には女の子の友達が少なかったのです。それはまるで双子の兄妹のように二人だけで育ってしまった私達に共通する、社会性の欠如でした。

「いじめられて一番つらいのは、一人きりになって、誰も助けてくれる人がいないことだわ。でもマサくんがそばに居てくれたら、わたしはつらくない。マサくんがつらい時にも、これからはわたしがそばに居る……」

わたしがそばに居る。

誰もが振り返るような美少女にそう言われて、本来、男であれば嬉しくて仕方がないはずの場面で、私はどこかやりきれない、複雑な感情を抱えていました。

愛美は確かに、私の知っているあのマナミちゃんでした。外見こそ魅力的な美少女に成長していたけれど、中身はあの子供の頃のマナちゃんのままです。

けれども私は、そんなマナちゃんとの再会を喜びつつも、心のどこかでは受け入れられずにいました。

今朝、教室に入ってくる愛美の姿を見たとき、私は彼女の姿に見とれて、魅了されていました。

けれどもそれがあのマナちゃんだとわかると、私は突然不安になり、落ち着かないような、納得がいかない気持ちに襲われました。

そして今、自分のすぐ隣に座っている愛美の姿が、私には眩しく、また生々しく感じられてたまりません。

その膨らんだ形のよい胸が、長い足が、スカートからのぞく白い太ももが、なんだか重く感じられるほどに、邪魔に思えてなりません。

その抜群のスタイルを誇る美少女の身体が、魅力的であればあるほど、それは自分と彼女との距離を遠ざける、気持ちを通さない壁のように感じられたのです。

（ずっとあの日のままの小さな女の子で居てくれたらよかったのに……）

私のお嫁さんになりたいと言ってくれた小さな女の子。

遠い記憶の中に、ずっとしまっておくはずだった思い出。

その女の子が、思い出の中から飛び出して、生身の身体を持った本物の女性として現実に現

れてしまった。
そのことに、一抹の不安と寂しさを私は感じていたのです。

「ねえ、マサくん……」

ほんの数秒の間、物思いに耽っていた私ですが、ささやくような愛美の声にドキッとして、現実に戻ります。愛美は寄りかかるように身を乗り出して、上目遣いに私のことを見つめていました。

「キスして……？」

「えっ、ええっ!?」

私は露骨に慌てた声を出してしまいました。
愛美は目を閉じています。自分のすぐ横には、見るからに優しく柔らかそうな愛美の肉体があります。
この身体を抱き締めたら、きっと気持ちいいんだろうな……

でもそうしてしまったら、きっともう戻れない……

「ご、ごめんっ！」

私は愛美の肩に手を置き、突き放すようにして彼女の身体を押し戻しました。

驚いた彼女は目を開け、残念そうな顔で私を見つめています。

「き、気持ちの準備が……僕達、そういうのは、まだ早いと思う……！」

彼女の瞳の中に、落胆の色が明らかに見て取れ、私は当惑して焦り、どうしていいかわからなくなりました。

「ば、バス停まで送るよ……！」

数秒の沈黙の後、言葉に詰まった私はベンチから立ち上がり、帰途に着く彼女をキャンパスの外のバス停まで送る提案をしました。

「う、うん……ありがとう……」

少し気まずい空気が流れ、お互いに当惑しながらも、愛美は素直にそう言って、私達は中庭を抜けて、キャンパスの出口に向かって歩き出しました。

（うっ……？）

ベンチから立ち上がった時、私は再び、少し気まずい思いを味わいました。

私は背が低い方です。

それに比べて、スタイル抜群で、足も長くグラビアアイドルのような愛美は、女の子の中では背が高い方でした。

二人、立ち上がって並ぶと、背の高さが並んでしまっていました。

聞いてみると、愛美の身長は１６７センチだそうです。私は１６８センチだったので、目線の高さはほとんど同じです。

それどころか、愛美は姿勢が良いせいでしょうか、一緒に並んで歩いていると、むしろ私の方が見上げているような感覚に陥ります。

「マナちゃん、背が伸びたね」

「マサくんこそ」

「え？」

私は愛美の顔を見返しましたが、優しく微笑む彼女の顔は、冗談を言っているようには見えません。

「そりゃ、子供の頃と比べたら伸びたけど、僕は……」

成長期である中学時代に、帰宅部で運動をしなかったからでしょうか。それとも、ずっといじめられていて心身共に萎縮してしまったからでしょうか。私は、父親が平均的な身長にも関わらず、中学を卒業する頃になっても、その父親よりも5センチも身長が低いままでした。

「ふふ、でも、こうやって目線が並んでるのって、わたしは好きだな。なんだか子供の頃と同じみたい」

愛美の言葉に、私ははっとしました。

（そういえば、子供の頃は、身長なんて気にしなかったよな……）

キャンパスの外に出ると、バスは間もなくやって来て、私達は「バイバイ」と手を振って別れました。その気軽な挨拶は子供の頃と同じですが、私達はあの頃とは、確かに変わってしまっています。

バスに乗り込む愛美の後ろ姿を見つめながら、私は彼女のお尻と、スカートから伸びる足に見とれていました。

（うわ、なんていいお尻なんだろう……）

大き過ぎず小さ過ぎず、丸く形のいいお尻の曲線が、彼女がステップを登る度、制服のスカートごしに透けて見え、そしてその緩やかな曲線は、適度にむっちりとした太ももへと合流し、すらっとした直線となって膝まで伸びています。その完璧な流線型が私の脳髄を直撃し、決し

て忘れられない衝撃となって記憶されるまで、一秒もかかりませんでした。

思えばこれが、幼い頃のあのバーベキューの日と同じように、大人になった愛美から、私が永遠に離れられなくなってしまった決定的な瞬間でした。ほんの数秒の間に、愛美のお尻の曲線が、私の脳細胞の奥深く、その深層意識の一番深いところに刷り込まれてしまったのです。それはひょっとすると、遺伝子レベルで仕組まれたものだったのかもしれません。

（吹奏楽、やろう……）

走り去るバスを見つめながら、私は心の中でそう呟いていました。

（体験版ここまで）

©八ヶ岳昌司　２０２１年

表紙絵　publicdomainq